慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	交詢社百年史
Sub Title	One hundred years of Kojun-sha
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1984
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.77, No.3 (1984. 8) ,p.471(155)- 473(157)
JaLC DOI	10.14991/001.19840801-0155
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19840801-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

『交詢社百年史』

（昭和58年，交詢社発行，A 5 判，723頁，非売品）

交詢社という名前は，塾生諸君のような若い世代には馴染みがうすく，あるいは高等学校での日本史の授業のときに，聞いたことがあるという程度かもしれない。それとも入学試験準備の際，大正元年，憲政護憲運動，いわゆる大正デモクラシーのそもそもの発端が，交詢社員である三田派の人々，すなわち慶応義塾出身者の財界人を中心として，その炉辺において話し合われたことからはじまるというような認識をえたかもしれない。しかし交詢社は，わが国の近代化の歴史において没すべからざる重要な役割を担ったものであることを知らねばならない。ここにとり上げた『交詢社百年史』は，このユニークな社会教育ならびに社交機関一世紀の歴史を通じて，日本近代化過程のある断面を語ったものであるということができる。

福沢諭吉の三大事業として，俗に，慶応義塾，『時事新報』，そして交詢社の創設があげられる。『時事新報』は不幸にして中途で挫折したが，慶応義塾と交詢社は隆盛を誇り，今日に至っている。本書は，この交詢社が，創立された明治13年（1880年）から数えて一世紀，1980年，創立百年を迎えたのを機会に，明治初年から今日に至るまでのその輝かしい足跡を，近代日本の歴史とともに叙述したものである。高村象平理事長の序および富田正文氏の緒言によれば，この事業は，福沢時太郎，中村仙一郎，安西英太郎，服部礼次郎，池田弥三郎，それに富田正文，昆野義平および佐志伝の諸氏を編集委員とし，実際には，富田氏の指導の下に，佐志，昆野および高輪真澄の三氏により執筆されたものである。次にその目次を掲げよう。

口絵
序　（高村象平）
緒言（富田正文）
凡例
第一編　創立事情と設立経過
　第一章　創立の背景と福沢諭吉の意図
　第二章　設立の経過
　第三章　発会式
　第四章　交詢社結成の社会的意義
第二編　社会教育機関としての性格
　第一章　『交詢雑誌』の発行
　第二章　創立当初の活動状況
　第三章　巡回委員の派遣と支社の設置
　第四章　私擬憲法法案と明治14年の政変
　第五章　維持経営の苦心
　第六章　社員の量的質的変化
　第七章　『日本紳士録』の発行と図書の出版
　第八章　福沢諭吉の死去
第三編　社交クラブとしての性格
　第一章　社交クラブとしての充実
　第二章　財団法人への改組
　第三章　関東大震災
第四編　交詢社の発展
　第一章　本社会館の建設
　第二章　創立五十年
　第三章　社交機関としての体制整う
　第四章　社交機関としての本格的活動
　第五章　戦前の同好会活動
第五編　戦中戦後期
　第一章　太平洋戦争の影響
　第二章　戦後の混乱期
第六編　拡充の時代
　第一章　高橋誠一郎の理事長就任
　第二章　常例午餐会の復活
　第三章　『交詢雑誌』・『日本紳士録』の復刊
　第四章　創立記念日を祝う
　第五章　戦後の同好会活動
第七編　創立百年を迎える
　第一章　創立の精神と百年の伝統
　第二章　創立百周年
　第三章　現在の活動状況
　追記，付録（資料，年表，人名索引），後記
　　特別寄稿「交詢社と私」

福沢諭吉は，『学問のすゝめ』第九編においてつぎのように，「人間交際」について論じている。「人の性は群居を好み，決して独歩孤立するを得ず。夫婦親子にては，未だ此性情を満足せしむるに足らず。必ずしも広く他人に交り，其交愈広ければ一身の幸福愈大なるを覚ゆるものにて，即是れ人間交際の起る由縁（よすが）なり」（『福沢諭吉全集』第3巻，87頁，『福沢諭吉選集』〔岩波版〕第3巻116頁）。外国語を成熟した誰にも理解し易い表現で日本語に言いかえることは福沢をはじめ，明治

の洋学者は誰しも苦心を強いられたところであった。福沢はその意味では，西洋文明の本質を把握する天稟ともいうべき才能を具えていたが，この人間交際論にもそのことがよくあらわれている。

福沢は今日いうところの「社会」(society) を「人間交際」と訳したのだと一般にいわれているが，今日，society を人間交際と訳す人はいない。しかし人間交際とは，人間の社会の実態——庶民の生きざま——をまことに生き生きと伝える語感を内に秘めており，「社会」と言ったのでは，なにか漠然として抽象的な印象をまぬがれえないのに，人間交際という言葉は，血の通った人々の営みという実感をともなう。第一編の執筆者佐志氏もこの点について，

> ただ福沢が「人間交際」とか「人間の交際」という言葉を使う場合，通常の意味で「人と人とのつきあい」を指す時と，今日ではむしろ「社会」という単語をおきかえた方が理解し易い時がある（4頁）。

とのべておられる。人間交際の場として，慶応義塾構内における万来社や明治8年，演説館の設立などは，こうした福沢の思想を具体化したものであると言っても過言ではない。

今日もなお，福沢の見識の高さにわれわれが敬服するのは，たとえば，人間交際論におけるつぎのような文章に出会うときであろう。

> 又人間の交際に於て，相手の人を見ずして其為したる事を見る歟，若しくは其人の言を遠方より伝へ聞て，少しく我意に叶はざるものあれば，必ず同情相憐むの心をば生ぜずして，却て之を忌み嫌ふの念を起し，之を悪で其実に過ぐること多し。此亦人の天性と習慣とに由て然るものなり。物事の相談に伝言文通にて整はざるものも直談にて圓く治ることあり。又人の常の言に，実は斯くの訳なれども面と向てはまさか左様にも，と云ふことあり。即ち是れ人類の至情にて堪忍の心の在る所なり。既に堪忍の心を生ずるときは，情実互に相通じて怨望嫉妬の念は忽ち消散せざるをえず。古今に暗殺の例少なからずと雖ども，余常に云へることあり，若し好機会ありて，其殺すものと殺さるゝ者とをして数日の間同処に置き，互に隠す所なくして其実の心情を吐かしむることあらば，如何なる讐敵にても必ず相和するのみならず，或は無二の朋友たることもある可しと（『全集』第3巻114頁，『選集』145頁）。

福沢は，以上の精神から交詢社をおこしたのであって，従ってそれはあくまでも「人間交際」の場としての社交機関として，そしてさらには社会教育の目的を担うものとして考えられたものである。いわゆる政治団体あるいは政治的な結社でないことはもちろん，政党の運動と特別な関係をもつものではなかったし，福沢もそのようにみられることを警戒したのであった。ただ社員のなかに，熱心な政党員がおり，交詢社の談話室において政治上の問題が語られることは当然で，このためにしばしば交詢社が三田派の政治的な結社のように一般に誤解されることも少なくなかった。とくに明治14年の政変の時期や，大正デモクラシー期の交詢社は，たとえば前者の場合，小幡篤次郎，中上川彦次郎，矢野文雄，馬場辰猪が中心となり，私擬憲法草案を起草して反響をまきおこし（167頁以下），また大正デモクラシーの時期には，第三次桂内閣を内閣総辞職に追い込んだ尾崎行雄等の活動のはなばなしさもあって，交詢社は社交クラブ，社会教育機関であるとともに，政治的色彩をもつ団体と考えられる傾向があった。

だがこれは，福沢が門下生岩橋謹次郎に宛てた書簡のなかで，「尚三田政党云々被仰下，政党は間違ならん。先日より小幡小泉其他新舊社中30名計りの発起にて知識交換世務諮詢と申趣意を以て一社を結び，社則等も略整ひ候よし，必ず御聞込の事はこの結社の一條ならん。……」（『全集』第17巻347頁）とのべているところからも，政治に無関心ではないが，政党ではないという意味が了解される。

以上のように，福沢の精神的意図を深く体化させた交詢社が，明治13年1月社員数1,767名をもって発足し，今日に至るまで100余年の歴史を経たわけであるが，この書物の出現によって近代日本における社会教育に果したその役割に，はじめて照明があてられたというのが，筆者の実感である。執筆者の佐志伝氏ならびに昆野義平氏，それにこの両氏を助けられた高輪真澄氏の努力にたいし，敬意を表したい。

研究者としてこの大著に接した場合，文中に躍動する福沢をめぐってのさまざまな人間群像の息吹き，これらの人々の著作や，これらの福沢門下生の活動を記録した文書の存在に筆者は大いに啓発されたし，日本近代史および福沢研究への新しい刺戟を読者に与えるものと確信している。その意味でも巻末の「資料」は貴重である。

また一般的な読者としてみた場合，文中のところど

ころに挿入されている特別寄稿「交詢社と私」は，オアシスのように新鮮である。

読み終って感じたことは多い。筆者の印象としてははじめの第二篇までが非常に面白く，「第三篇社交クラブとしての性格」以後は，あまり面白くなくなったのを感じた。もちろん第二次大戦中，戦後の職員や役員諸氏の努力は感銘深いものがあったが……。最初はその理由がわからなかったが，最後に佐志氏の「後記」を読むに至って氷解した。「資料の根幹となるべき交詢社の機関誌が，明治末期から大正年間にかけてと，昭和の戦中戦後期の二期にわたり大きな空白があり，これを合わせると何んと30年間にも及んでいる」という事情である。

筆者もはじめ，福沢の死後，社交クラブとしての性格が強くなったとはいえ，偉大な師匠なき後は，その社会教育機関としての役割はかくも後退するのかと思ったりしたが，それは偏見だったのであろうか。福沢の死後，交詢社はたとえ一時的とはいえ明治から大正にかけて10数年間，『交詢雑誌』を何故休刊した，あるいはしなければならなかったか，このことが交詢社のその後の活動に大きく影響したのだと思われる。

また筆者は欲ばりかもしれないが，犬養毅首相暗殺などについて，もっとくわしく本書からききたかった。犬養の不慮の死は，日本におけるデモクラシーの運命を象徴するものとすれば，犬養にたいする非道な攻撃は，交詢社の精神，福沢諭吉の訓を圧殺しようとする動きである。交詢社社中は，これにたいし何らの抗議行動，あるいは声明を発しなかったのであろうか。ともあれ，「その後首相犬養毅は組閣以来申歳にして五・一五事件の犠牲となり凶弾に倒れたのは痛恨の極みであった」(343頁) とふれるにとどまる。

飯田　鼎
(経済学部教授)